

G-1 家庭科教育不振の諸要因について (第1報) その理論的究明

福岡大教育 高木 葉子

1. 新しい家庭科が誕生して20余年経過した今日、なおその理念は深く広く浸透せず、じゅうぶん好ましい成果をあげているとは言いがたい。現実に見る授業の多くが、何のために何を考えさせ、くふうさせ、そして実践させるかと言う深く考察にとぼしく、変革し続ける家庭生活を前に、自信と確信に満ちた歩みをふみ出すために、家庭科教育はその教育的使命を明確にしなければならない。現在なお、家庭科教育は不振であり、ゆらぎ、廃止論も後をたたない。この不振をもたらす諸要因を究明することにより、確固たる位置を獲得する一つの助けとしたい。

2. 雑誌、教育、教育評論、家庭科教育、家庭科学、家庭科教育学会誌、家政学雑誌技術教育、及び家庭科教育関係図書によりその手がかりを得、意見を述べる。

3. 家庭科教育不振の根本原因として、常見育男氏は、旧家族制度下の古い家庭科が根深く残存し、新しい性格の家庭科として実質的に生まれ変わっていないという歴史性に求めている。これに加えて、1. 新しい家庭科の目標内容の構想が今なお一致していないこと、2. その目ざす家庭の民主化と男女別学との矛盾。3. 科学主義教科論台頭。4. 家庭生活を教育対象として認識していないこと、等に求め、これらを究明した。